
あたしは、猫。 ~ s h o r t s t o r y ~

碧檜

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

あたしは、猫。〈short story〉

【Nコード】

N2038E

【作者名】

碧檜

【あらすじ】

童話風味ほのぼのラブストーリー。「べた恋」参加作品です。シヤルル・ペロー作「長靴をはいた猫」をモチーフとしました。（連載中の「あたしは、猫。」の元となった短編です）

(前書き)

「べた恋」参加作品です。

第1回のテーマ「出逢い」に絞って作ってみました。少しだけ長いですが、お付き合いいただけると嬉しいです。

あたしは、猫。～short story～

夏のある日。

アリスは主人と隣町に買い物に来ていた。

主人は例によって買い物に夢中になっていて、アリスのことなんかすっかり忘れている。

その日は、ひどく暑い日で、馬車の中はひどい熱気だった。

アリスは馬車で待つのはもう限界だと、馬車のドアを引つ掻き、なんとかこじ開けた。このままだと死んでしまう。

少しだけ冷たい外気と砂埃が馬車に流れ込み、視界に噴水が飛び込んでくる。

アリスは、冷たい空気と水を求め、馬車の外へと一気に飛び出した。

目の前には、馬がいた。

あ。

アリスの目の前は一気に真っ暗になった。

*

「ああ、目を開けたよ！父さん！」

気がつくと、アリスの目の前に一人の人間がいた。
どうやら性別は男。

(……変な髪型)

アリスはまずそう思った。
ブルーグレーのつやのない髪はあまりにぼさぼさで、前髪は鼻の下まで伸び、顔の大部分を隠している。

伸びきった髪を後ろに束ねているが、しばらく櫛を通した形跡がないように思えた。

顔は薄汚れていて、微かに覗く頬に薄くそばかすが浮いている。

主人とは大違いだった。アリスの主人は、女性だったからかもしれないが、もつと綺麗な格好をして、髪はいつも高く結い上げられ、形の良い卵形の顔がすっきりと見えるようにしていた。

もちろん毎日の化粧も欠かさない。
なので、余計に奇妙だった。

「あの、……はど……?」

アリスは少年に向かって聞く。

「あ、君……」

少年は口をぽかんと開けてアリスを見た。

「魔法の猫」

アリスは彼の言葉を遮ってそう言った。

(……どんな顔をするかしら)

思わずアリスはにやりと笑う。

「言葉が話せるんだ……」

少年はただただ感心したという表情をする。

そう、アリスは猫だ。しかしただの猫ではない。

魔法によつて、言葉を話せるようになった特別な猫。

その仕組みは世間には公表されていないが、そういう人獣間の言語の翻訳を行う魔法があることは有名だった。

そんな猫はやはり人気が高く、一部の裕福な人間にしかとても手に入れられるものではなかった。

そして、目の前に居る少年は明らかに裕福ではなさそうだった。

おそらく魔法の猫を見るのも初めてなのだろう。

アリスは、その目を細めて、ふたたびにやりと笑うと、体を丸めて立ち上がろうとした。

「つつ」

後ろ足に激痛が走る。

アリスは立ち上がれず、再び、丸まって床に倒れ込んだ。

「ああ、駄目だよ。骨折れてるみたいだから」

「なん、で」

「あれ？覚えてない？君、馬に轢かれたんだよ。あと少し打ちどころが悪かったら死んだ。……このくらいで済んで良かったね」

目の前の少年はそう言うと、髪をかきあげ、にこりと笑う。

アリスは、その顔に目を奪われた。

隠されていた少年の瞳は、あまりにも美しかった。

澄んだ泉を覗き込んだかのような、深い深い青色。

よく見ると、顔の造りはひどく端正だ。
一瞬心臓が跳ね上がった。

(あれれ?……変だわ。人間なんかにときめいちゃって)

そんな想いを顔に出すのが嫌で、アリスはふいと目を逸らすと、
急いで話を切り替えた。

「さっきの質問だけど、……ここってどこ?あたしの主人を知らない?」

「……ここはオーランシユの粉屋だよ。君の主人かあ……君のこと探してるかもしれないね」

少年はのんびりした口調でそう言った。

オーランシユ、それはアリスが住んでいる町の隣町の名前だった。

「だれも探しに来なかった?」

「……うん。多分」

「多分?」

「……僕は、ずっとここにいたから、知らないんだ。ちょっと父さんに聞いてくるよ」

ずっと、ここに

つまりずっとアリスを看病してきてくれたということが。

そう気がついて、アリスはなんだか嬉しくなった。

主人は、アリスの世話などは全部使用人任せにしている、自分の好きな時だけにアリスに構おうとするのだ。

もちろんアリスの具合が悪い時でも、それは同じだった。
だから、余計にアリスは嬉しかった。

耳を澄ますと、隣の部屋から声が聞こえて来た。

「……うん。そうか、綺麗なメスのペルシャ猫ね。……やっぱりあの猫のことみたいだな」

ドアが開いたかと思うと、少年がいきなりアリスを抱き上げ、お腹の辺りを見ようとする。

「ちょ、ちょっと……どこ見てるのよっ！！」

「ど、どこって……」

「あたしならメスよ！失礼ねっ。話が出るんだから聞けばいいでしょー！！」

アリスは思いっきり少年の手を引つ掻いた。

「いてっ」

少年は悲鳴を上げたが、アリスを落とすようなことはしなかった。怪我を気遣ってくれているらしい。

アリスをそつと床に置くと、少年は小さな声で呟いた。

「じ、ごめん」

少年がその長い前髪の下で赤くなっているのを見て、アリスも思わず赤くなる。

(うつわ……そんな顔しないでよ！余計に恥ずかしいじゃない！！)

「えと、探しに来たんだって、やっぱり。銀色の毛で緑の瞳のペルシャ猫って君のことかな？……名前はアリスっていう」

「そ、そうよ。あたしのこと!」

アリスはまだ動揺を隠せず、上ずった声で言う。

「父さんさ、猫の種類とか良く知らなくって。知らないって言っちゃったみたいなんだ……ごめんよ」

「いいの……あたし、あの家出たかったから、ちょうど良かったわ」

アリスは半分本音で、半分強がりですう言った。

「え、じゃあこれからどうするんだよ?」

「……なんとかするわよ」

そう言ったものの、アリスは生まれてこのかた、ずっと裕福な家で養われて来たのだ。そう簡単に自立できるわけではない。

少年は、少し微笑むと、アリスの頭をそっと撫でる。

「とりあえず怪我が治るまでは、ここに居ろよ。怪我が治ったら、出て行くなり、家に帰るなりすればいいだろ?」

アリスの不安を見透かすようなその笑顔に、彼女は、いつの間にか素直に頷いていた。

それからアリスはこの粉屋に厄介になることとなった。

少年は毎日甲斐甲斐しくアリスの世話をしてくれていた。昼間は仕事で忙しいはずなのに、アリスのことを忘れることは無かった。

アリスの怪我が大分良くなってきたある日、彼女は、話しかけようとして、少年の名を知らないことに気がついた。

「ねえ……あなた、名前は？」

「リュシアン」

「ふうん……リュシアンね……。あなたって何歳なの？」

「17歳。君は？」

それにしても幼く見える、そうアリスは思った。

なんだかからかってみたくなり、アリスは意地悪なことを言うてみる。

「……女の子に歳を尋ねるもんじゃないわ」

「……ごめん」

リュシアンは困ったような顔をして頭を掻く。

その様子が妙に可愛らしかったので、アリスは笑って答えた。

「……1歳よ。猫だからもう大人だけど」

「へえ。大人になるのが早いんだ」

「死ぬのも早いけどね」

アリスが何気なくいうと、リュシアンはちょっと悲しそうな顔をした。

「そうか……猫って寿命が短いのか」

「なによ、そんな顔しないでよ。その分毎日充実してるんだから」

アリスは、リュシアンに猫パンチを繰り返す。

手がリュシアンの前髪に当たり、その瞳が髪の間から覗く。思わずアリスはそれに釘付けになる。

(ま、まただわ……。どうしてかしら)

アリスはどきまぎする心臓を押さえて、俯く。

「髪くらい切ればいいのに。鬱陶しいでしょうっ？それ」

リュシアンは、前髪を少し持ち上げると、上目遣いで、それを見上げる。

青い瞳がまたもやしっかり見えて、アリスはそれから目が離せない。

「まあね……。でも切りに行くお金もないし。毎日忙しくて、そんな暇もないんだ」

「あなたの家って、……。貧乏なの？」

アリスは言ってしまった後後悔した。

(さ、さすがに失礼だったかも)

ところが、リュシアンはにっこりと笑って、頷く。

「そうなんだ。貧乏暇なし」

誇らしげとも思える態度に、アリスは啞然とする。

アリスの周りに居た人間は、誰も彼も「貧乏」をひどく恥ずかしいことだと思っていた。

しかしこの少年は違っらしい。

(不思議な人だわ)

アリスは俄然、この少年に興味がわいて来たのだった。

*

そして1ヶ月後。アリスの怪我也大体治り、彼女は足を引きずりつつも歩けるようになった。

しかし。

(なんだか……治って欲しくないような)

怪我が治れば、ここを出て行かなければならない。

アリスはそれがひどく辛いことのように感じていた。

何よりも、リュシアンあの笑顔を見ることが出来なくなる

それが一番嫌なのだった。

アリスは今までに何かに執着をしたことなど一度も無い。なのに、あの笑顔だけはどうしても手放したくないと切に感じていた。

それでも、アリスはその感情をごまかし続けていた。

(あたしは、猫なのよ)

「そろそろ、家に帰るか？こんな貧しい暮らし、嫌になっただろう？」

ある日リュシアンがアリスに向かって言った。

(来るべきものが来た)

アリスは、ギョツと目を瞑ると、胸の痛みを堪えながらわざと明るく言う。

「そ、そうね。さすがに、あんまり長く居ると、貧乏がさらに貧乏になってしまっわ」

しまったと思ったけれど、もう遅い。

アリスは自分のその口を呪う。

「ハハハ。そうだね」

リュシアンは全く気にしていない。

アリスはホツとしつつ、やはり負担になっていたのだと、軽くシヨックを受けた。

猫一匹と言えど、その食いぶちをどこから捻出しなければならぬい。

リュシアンはどうやら、自分の食事を削ってアリスに与えてくれていたようなのだ。

アリスは最近になってそのことに気がついて、驚いた。

(世話をしてもらった恩は返さないといけないわ)

いつの間にかアリスはそんな風に思い始めていた。

それが、もっとリュシアンと一緒にいたいという願いから来ているものだというのは分かっていたが、彼女はそう自分に言い訳をしていた。

*

アリスは、その日夜リュシアンに気づかれないようにそっと部屋を抜け出すと、近所の家からこっそりとパンをくすねて来た。

そしてリュシアンの枕元にそっと置く。

(喜んでもらえるかしら)

ワクワクした気持ちで胸をいっぱいにしながら、アリスは部屋の隅で眠りについた。

「アリス」

翌朝、リュシアンがアリスを呼ぶ。

アリスは笑顔で振り向いた。

しかし、リュシアンの顔は曇っていた。

その手にはアリスが盗って来たパンがあった。

「アリスだろうか？これ」

リュシアンは悲しそうな光をその瞳に浮かべていた。

(どうして……そんな顔するの)

リュシアンの笑顔が見れると思って、やったことだったのだ。それなのに。

「人様が必死で働いて手に入れたものをこんな風に奪うなんて。僕はこういうやり方は嫌いだ」

(嫌い)

アリスは胸をひと突きされたような気分で、俯くと黙り込んだ。何か言おうとすると涙がこぼれそうだった。

アリスは、結局謝ることも出来ず、そのまま窓から部屋の外へと飛び出した。

(何よ……何よ!…!)

どうやら、リュシアンはひどく融通が利かないらしい。

アリスのやり方では彼を喜ばすことはなかなか出来そうになかった。

(……もうちょっとやり方を考えないと)

アリスはその日一日中、その方法について考え続けたのだった。

*

翌朝、アリスはある城へと向かって下見に向かった。

その城とは、噂だけに聞いていた、この地方では知る人ぞ知る人食いが住んでいると言う城だった。

(悪いヤツから奪うのなら、リュシアンも怒らないわ、きっと)

アリスはそう思っていた。

人食いは様々な悪事を働いて、財産をかき集め、巨大な富を一代で築き上げた。

その名の通り、人も食うらしく、領主が兵を派遣したこともあったのだが、城から帰って来た者は居なかった。

そのため、その地域一帯では、彼の言うことに逆らえる者がおらず、毎日びくびくと暮らしているという。

アリスは、こっそりと城の裏口から忍び込むと、高い塔のそびえ立つその城を駆け回った。

城の中には至る所に金銀財宝が置かれていたが、一つ一つがとても大きくて、アリスには持ち帰れそうにない代物ばかりだった。

(どうしようかしら)

アリスは家に帰ると、財宝を手に入れる手段を考え続けた。

*

人食いの城に行くため、アリスはその日綺麗に身繕いをした。

丁寧に毛並みをそろえ、首に綺麗なリボンをつけ、前足に銀をピカピカに磨いた腕輪をつける。

これらは全部人食いの城からくすねて来たものだった。

「どこに行くんだい？そんなにおしゃれをして」

リュシアンが不審そうにアリスを見るが、アリスはそれを無視して、城へと向かって駆け出した。

アリスはさすがに恐れで足が震えていた。

人食いは、人だけでなく猫も食べるかもしれない。

(きつとうまくいくわ。今度こそ、リュシアンに喜んでもらうんだから！)

怯んでしまいそうな自分にそう言い聞かせて、正面の門を叩く。門番がアリスを見て訝しむ。

「なんだい。こんなところに来ちゃ駄目だ。嫌な目に遭いたくなかったらとつとお帰り」

「いいえ、帰るわけにはいかないの。カラバ侯爵のお使いで参りましたとお伝えください」

アリスは震える声を必死で抑えながら、にこやかに微笑み言った。カラバ公爵というのはアリスの前の主人の名前である。

その名を出せば、無下には出来まい、アリスはそう思っていた。

しばらくして、門番が戻って来ると、哀れむような視線をアリスに向けて、付いて来いと手招きした。

*

「突然の訪問にもご対応いただきまして、ありがとうございます」

アリスは通された部屋に入るなり、そう言って頭を下げ床にしゃぶを垂れる。

「あらまあ、これはこれは、綺麗な猫だわねえ。魔法の猫はたくさん見たことがあるけれど、あなた、特に美しいわ。」

私、美しいもの、ダアイスキなのよお」

低い声が部屋に響き渡る。

アリスは顔を上げるのが心底怖かった。恐ろしいものが目に入る気がしたのだ。

そして予想は外れなかった。

アリスは人食いの姿に卒倒しそうになる。

横長の顔に、ぎよろりとした目、大きな口に大きな鼻。一つ一つのパーツがひどく大きく、その一つ一つに丹念に化粧が施されていて、余計に強調されている。

体も大きく、そのお腹の中にはアリスが100匹くらいは入りそうだった。

(こ、これは、こいつが人食いでなくても近寄りたくない……)

アリスは吐き気を催すが、必死でそれを堪えつつ笑顔を見せる。

「主人からお噂は常々聞いておりました。偶然この前を通りかかりましたので、ご挨拶だけでもさせて頂かないと失礼かと思ひまして」

アリスは主人の従者を必死で真似していた。

(疑われたらおしまいだわ)

幸い人食いはアリスを珍しそうに眺めてみるだけで、疑いの色はその目には浮かんでいないように思えた。

そうして、侍従を呼びつけると、アリスをもてなすように伝えている。

アリスは胸を撫で下ろし、もてなしを受けることとした。

そうして、しばらく豪華な食事を味わった後、アリスは切り出した。

人食いは酒を飲みすこぶる機嫌が良いように見えた。

「あなた様は、変身の魔法がとてもお得意とか。ぜひその技を見せて頂きたいのですが」

「それは余興としては面白いわねえ」

そう言つと、人食いは、侍従に言いつけて、小さな壘を持つて来させる。

彼はその中から一粒、月の光ような粒を取り出すと、一気にそれを飲み込んだ。

一呼吸後、彼は獅子に姿を変える。

アリスは目を見張った。

(す、すごい)

アリスは思わず梁の上に飛び上がつて避難していたが、彼が一呼吸置いて元の姿に戻るとそろそろと自分の席に戻った。

「それは、魔法なのでしょうが？」

アリスは尋ねる。

「ええ、そうよ。いちいち魔法を使うのも面倒だから、こうして、この粒に魔法を封じ込めてるのよ。」

だってねえ、この間だって、あの領主ったら突然兵士を送り込んで来たりするんですもの。いちいち呪文を唱えていたら命が危ないわ」

「噂では、小さなものにも変身することが出来るとか？さすがに…その大きなお体で、それは無理でしょう？」

アリスはわざと疑いの眼を人食いに向ける。機嫌を損ねたらと思うと、体が震えた。

「なあに？信じられないって言うの？わたしの魔法が」

ちよつとその頬を膨らませると、彼は月色の粒を一気に飲み込んだ。膨らんでまるで蛙のようになったその顔が、見る見るうちに縮んでいく。

変身が終わった頃には、彼は丸々した小さなネズミになっていた。アリスは素早く人食いに近寄ると、その腕から銀の腕輪を外し、太ったネズミの首にそれをはめ込んだ。

「すつごくお似合いよ!」

アリスは、朗らかにそう言う。

「何のつもりよ!これじゃあ、元に戻る時に首が絞まっちゃうじゃない!」

ネズミは高くなった声でそう叫ぶと、焦って首輪を外そうとするが、太りすぎて抜けない。そして魔法が解けかけるのを感じたのか、慌てて呪文を唱え出す。

「食べちゃってもいいのよ。……でもあたし、舌が肥えてるから、さすがにこの頃ネズミを食べようとは思わないのよね……。せめてお魚とかに姿を変えてくれれば良かったのに」

アリスが屈み込んでネズミとなった人食いの目を覗き込む。

「さては領主の差し金ね!あのゴウツク親父!」

(はて?)

話が見えず、アリスは戸惑う。

「領主の差し金？……あなた悪いことしてるんじゃないの？」

「はあ？優しい私がそんなことするわけ無いでしょう？」

あの領主、私の財産が欲しくって、あらゆる手を使って、この城から私を追い出そうとしてるのよ！

噂を流したり、兵を送り込んだり！もともとこの辺一帯は私の一族の土地なんだから！誰が渡すもんですか！」

ネズミはキーキーと叫びまくる。

アリスはその剣幕に焦りだす。

「ご、ごめんなさい……あたし勘違いしてしまったみたい」

「分かったら、早くこの首輪を取ってちょうだい！」

アリスは、必死で首輪を引っ張るが、猫の手では嵌めるのは出来ても引き抜くのはなかなか難しい。

「埒があかないわ、その壘の中身を飲みなさい！」

言われるままにそれを飲むと、アリスの体が突如変化し始める。

(うわわわわわ！！！)

視界が歪む。目の前の風景がぎゅっと縮んだかと思うと、それが一気に固定される。

いつの間にか、アリスは人間の姿となっていた。

「ほらっ早く！」

急ぎ立てるようにネズミが足元で大騒ぎしている。

アリスは呆然と手の指を握ったり開いたりしていたが、慌てて、ネズミの首の輪を外しにかかった。
しかし、やはりとれない。

「あなた、太りすぎよ、やっぱり！」

アリスはそう言うと、ネズミのしっぽを思いっきり引っ張る。

「痛てててて！乱暴は止めて頂戴！しっぽが抜けちゃう！」

アリスも必死だ。どうも力加減がよく分からないのだ。

「痛い！痛いってば！……もういいわっ」

ネズミはそう叫ぶとアリスの手の中から抜け出す。

「ご、ごめんなさ、い……」

アリスはさすがに謝った。

（失敗しちゃった……。またリュシアンに呆れられちゃう……。また嫌いって言われちゃうよ……。）

アリスはいつの間にか目に涙を浮かべていた。

「なんであなたが泣くのよ。泣きたいのはこっちよ」

ネズミは涙目になってアリスを見上げる。

「……なにか事情があるのね？」

「アリスは我慢できずに、リュシアンのことを話す。」

「……ふうん、助けてもらったお礼ねえ。へええ、私、そういうの好きよ！」

ネズミは感心したようにそう言うと、ため息をつきつつアリスを眺める。

「それにしても、あなたやっぱり人間の姿も綺麗だったわね」

アリスは自分の姿を見下ろす。覆われていたはずの毛皮は無くなり、白い肌が銀色の長い髪の毛と真っ白な服に包まれている。服と肌の隙間がなんだか肌寒く、アリスは落ち着かなかった。

ネズミはしばらくアリスをうっとりとした目で眺めた後、顔をしかめる。

「……あゝあ、それにしても、どうしようかしら。こんなことバレたら領主にこの城あつという間に奪われちゃうわ。……しっかりと責任は取ってもらいますからね！」

「え？……どうやって？」

ネズミはにたりと笑うと、アリスの耳にそつとある事を囁いたのだった。

*

(……あ、あれがアリス……)

リュシアンは柱の影で固まっていた。

実は、リュシアンはアリスの様子がおかしいのに気がついて、後を追って来たのだった。

門番に無理を言っつて、城に入れてもらったはいいが、あまりの展開に出るに出て行けなかった。

どうも、アリスは、リュシアンのために人食いの城にまで乗り込んだらしい。

彼には、そこまでしてもらえらるほどのことをした覚えは全くなかった。

それにしても。

リュシアンは、アリスの変化した姿に一目で心を奪われていた。

アリスは、銀色の長い長い艶やかな髪の毛の、緑色の大きな美しい瞳をもった少女になっていた。歳は15、6に見える。

猫の姿と同じく、気高く、人を寄せ付けないような美しさだった。

(だめだぞ。 あいつは猫なんだから)

そう思っても、目に焼き付いたその姿はもう消せそうになかった。

「あ、リュシアン……」

アリスがふとこちらに気づく。その目がどうして、と問う。

「……アリスなのか……?」

アリスは頷く。

猫の時と同じでその緑色の瞳はエメラルドの様に輝いている。

「どうしてこんな無茶をするんだ。人食いの城なんか……！危ないだろう」

思わずそう言っけしめい、リュシアンは後悔する。

(どうして、僕はこんな言い方しか出来ないんだ！……どれだけアリスが怖かったことか……)

この間のことだつて、アリスの気持ちを考えたらもつと言い方があつたはずだつた。

いつも言っけしめつてから後悔する。

彼の心配通り、アリスは一氣に顔を曇らせる。

彼女は氣づかれていないと思っけしているみたいだが、強がっけみせしているその顔の裏は、ずいぶん脆い。

そんな顔を見ると、リュシアンは堪らない気持ちになっけしまつ。しかも今日の前に居るのは、猫ではなく、抱きしめたら折れそうな可憐な少女なのだ。

リュシアンは自分の気持ちが分からなくなっけていた。

(アリスは、猫だ)

そう思いつつも、腕の中に彼女を抱きしめたくて仕方が無い。

はじめてのその感情に、リュシアンは戸惑いを隠せなかつた。

必死で、その感情を押さえつけ、ようやくアリスの頭をそつと撫でる。

「ごめん。先にありがとつて言っけべきだつた」

アリスは顔を上げる。

「僕のために、ありがとう」

少し微笑むと、アリスの顔が一気に輝いた。

(なんて分かりやすいんだろう)

リュシアンは最初にアリスのそんな顔を見た時のことを思い出す。アリスは、リュシアンが微笑むと、その綺麗な目を細めて、とても幸せそうな顔をする。

リュシアンは、その顔がとても好きだった。

今少女の姿になっても、その幸せそうな顔は彼の心をくすぐった。猫の時の数倍の威力で。

(これは、飼い主のところにはとても返すことなんか出来ないな……)

リュシアンは、そう思い、深くため息をつく。しかし、もうアリスを養っていくだけのゆとりが無いのも確かだった。

粉屋の仕事だけでは、毎日生きていくだけしか稼げない。もともと猫を飼う余裕なんか全くないのだ。

そんな風にリュシアンが悶々と悩んでいると、アリスがリュシアンを見上げて言った。

「あのね、リュシアン。……あたし、ちょっと失敗しちゃって……。

穴埋めを手伝って欲しいの」

「え？」

「このお城の当主。この人食い……いえ、シャルル……が痩せるま

での間だけど」

「ええ？」

アリスは、うかつにも吹き出しそうになっている。
確かにこの容貌で……シャルルとは。

「だってねえ、きつと領主がやってくるわ。主が不在なんて。付け
入らせてたまるもんですか」

シャルルはその目をぎょろりと動かしてそう言う。

「あたしは猫だから。主はちよつと無理で」

願っても無い話だった。

もう少しだけ、アリスと、この城で。

リュシアンは微笑むと、力強く頷いた。

*

「ちよつと！シャルル！食べ過ぎよ！」

今日もアリスは、シャルルを追いかける。

猫の姿で。

「だって、お腹が空くんだものお」

シャルルはいっこうに痩せない。

でも、アリスはこっそりとそのことを喜んでる。

あたしは、猫。～short story～

アリスは願ひ続ける。

もう少しだけ、彼と一緒に居させて

> i 5 1 — 5 3 <

(後書き)

明らかに異色ですみません。

この機会に現代にチャレンジしようと思ったのですが、どうしても思い浮かばず……。

恋が始まるのかな？という微妙な感じを表したかったのですが、少しでも皆様に伝われば嬉しいです。

5/17 同タイトルで長編を始めました。少々マニアックなファンタジーを目指して書いていますので、ご興味があればどうぞ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2038e/>

あたしは、猫。～short story～

2009年3月24日09時36分発行